**＜98.5月-99.5月＞釜ケ崎居住懇の活動報告**

　　　　　　　　　　 1999.5.16　　文責：（事務局長）ありむら潜

●はじめに（今見える、釜ケ崎のもう一つの風景）

釜ケ崎の日雇い労働者や野宿生活者をめぐる状況は、ますます悪化しています。

こうした問題の深刻さに向かいあうとき、私たちはほとんどの場合、無力を感じるものです。

しかし、人生には時として自分（たち）の確かな存在と希望を感じとることができる季節があります。

そして、この一年間はまさしくそういうものでした。

しかも、その季節はもしかしたら、まだまだ続くのかもしれません。

さまざまな幸運と関係者のご協力を得て、簡宿プロジェクトが実現へ向かって動き出しています。

地域と社会の閉塞状況の中で、１年前は考えられなかった展開です。

ファースト・ステージ。それぞれで小さいながらの流れを創り出す（居住の安定化や仕事の創出など）。

セカンド・ステージ。それらを合流させ、地域を流れる大河（地域おこしによる＜人間居住＞の地としての釜ケ崎）をつくり出したい。

夢たわごとと冷笑されてもよい。

しかし、この半年でファースト・ステージは、ほんとに始まってしまったのだ。

以下、討議のために。

●経過（98年5月--11月はここでは省略）

1998年12／10　　　釜ケ崎居住懇が「緊急アピール： 野宿をなくし、人間居住を実現するための緊急策と抜本策」を発表。

その中で、居住の安定化と改善の全体構想（居住のはしご）の一部として、簡易宿泊所についてはシェルターとしての緊急避難的活用と、その後のアパート化を含む抜本改革案とを提案

1999年１／X　　　インターネットをつないだ簡宿組合理事（厚生部長）の山田和英さんが釜ケ崎資料センターおよび反失連等の合同ホームページを見て、初体験のe-mailで質問を送信。これをきっかけに、同資料センターの松繁さんらと「歴史的和解」が始まる。

2／9　　　松繁さんより居住懇アピールを手に入れた山田和英さんが「一つの羅針盤だ」として大きな興味を示し、居住懇にe-mailで質問を開始。（以後、ありむら事務局長と膨大なメールのやりとりが始まる）

2／24　　　連合大阪主催の野宿生活者問題シンポジウムに居住懇からのパネラーとしてありむら事務局長が参加。緊急アピールの骨格等について発言。

その終了直後の会場で、山田、ありむら等が初対面。そのまま喫茶店へ移動し、簡宿での生活保護受け入れとその未来像に関する合同勉強会の立ちあげに合意。

3／25　　居住懇で勉強会参加（招請）メンバーを検討

3／12　　「あいりん労働者の居住と暮らしの再建勉強会」の設立準備会開く（西成労働福祉センター会議室）

3／20　　　　第１回勉強会（安部乃荘）に講師として西成区福祉事務所係長の横石金男さんを（個人の立場で）呼ぶ。

簡宿での生活保護が実施されていないことのネックは、

a）収容保護しか認めない市立更生相談所条例の存在　b）簡宿が旅館業法にもとづく施設であること（市は居住地と見なさない方針）　c）行革がらみによりケースワーカーの大幅増員が困難、この３点が中心であること等を確認。

それらをすりぬける案（借り上げ方式で）を議論。

3／26　　　地域団体の新連絡組織「野宿者に生活保護を！連絡会議」の第５回会議があったので、居住懇としてオブザーバー参加（ありむら出席）。本件が進行中であることを構成各団体に示唆し、案公表後の協力を事前要請。

3／28　　 簡宿組合が横石さんを招き、独自に学習会。この席で、横石案（「リハビリ的施設」と「シェルター」の２種類の目的に限定したホテル借り上げ構想）が提示される。簡宿組合側の雰囲気がいっきに積極化。

3／29 　　 横石案の詳細についてありむら事務局長がヒアリングし、山田さんをサポート。

4／1 　　地域NPO「出会いの家」代表の渡部宗正さんを山田・横石さんらと共同で訪問し、横石プランについてのヒアリング（４時間）。

4／8　　　横石さんをあいりん再生勉強会の正式メンバーとして受け入れ、第2回勉強会（センター会議室）。

4／12　　　簡宿組合常任理事会にて議論が盛り上がり、横石案の大筋を簡宿案として採用決定。

4／13・14　　本件の議論に触発され、横浜・寿町での簡宿保護の実態を簡宿組合メンバーが視察（←居住懇がcoodinate）。その長所、短所、課題を学ぶ。

4／17　　第３回あいりん再生勉強会（安部乃荘）。簡宿組合の山田純範副理事長より勉強会へ感謝の意が表明される。（市職労民生局支部長であるが、個人として）稲葉貞夫さんが正式メンバーとして合流。”中の島”や国の動きが自立支援センター開設路線であること等の現実が報告される。

4／20　　 簡宿組合理事会にて、「野宿生活者対策およびあいりん活性化にあたっての、簡宿活用についての要望書（素案）」が採択される。

4／23　　ありむら事務局長、山田和英さんの要請により（e-mailでのやりとりを補完するため）緊急ミーティング。今後の運動論（行政、議員、地域団体、市民、マスメディアへの各アプローチ）について作戦会議。居住懇はおもに地域団体とマスメディアへの働きかけを受け持つことで、幅広い戦線の構築をサポートすることを再確認。

4／24　　簡宿組合内に運動面の司令塔、「簡宿保護実現委員会」（仮称）を設置。

山田和英さん、組合内の若手世代に「今が勝負時！」と積極参加を緊急アピール。

4／27　　　簡宿組合、市民生局の中元保護課長代理らに要望書（素案）についてのアドヴァイスを求める形で、意見交換会。

4／28　　　簡宿組合、西成区役所担当部局（調整主幹等）に要望書（素案）についてのアドヴァイスを求める形で、意見交換会。

4／30　　　簡宿組合、同一地域内で”競合相手”となるかもしれない（社会福祉法人）大阪自彊館の吉村理事長を訪問し、あいさつと提案の説明。「反対する理由は何もない。近く開催予定の地域ぐるみ懇談会へぜひ参加を」との発言をもらう。

4／30　　　居住懇（ありむら、住田）、釜ケ崎反失業連絡会議を訪問し（ふるさとの家）、本件の経過とプラン内容を説明し、意見交換。全面的な賛意と相互協力、および簡宿組合との直接会談承諾を得る。

5／6　　　山田和英さん、上京。居住懇の紹介により、山谷地区の居住問題NPO「ふるさとの会」が推進中の「ドヤ借り上げ→グループホームへの改造」プロジェクトを視察。

5／6　　　ありむらが釜ケ崎医療連の大谷代表に電話し、本件について説明。基本的賛意を得る。

5／7　　　居住懇（ありむら、住田、西田）、全港湾建設支部西成分会を訪問し、本件の経過とプラン内容を説明し、意見交換。賛同とアドヴァイスを得る。

5／12　　　反失連と簡宿組合（山田和英）会談が実現（ふるさとの家）。本件での協力と今後の協働について、意見交換。居住懇（ありむら、阪東）がcoordinaterとしてサポート。

5／13　　　第４回あいりん再生勉強会（安倍乃荘）。簡宿組合内部の盛り上がりを反映し、山田隆弘さんが初参加、積極姿勢を示す。市長宛て要望書の最終文案について、くわしく論議。

5／14　　　簡宿組合、市民生局の中川生活保護課長らと要望書（案）内容について２度目の意見交換。

かねてつきあいのある地元選出の辻昭二郎市議（自民）らにも今後の支援を要請し、了承を得たもよう。他党市議や柳本代議士（自民）に関しては、不明および未定のもよう（5／15現在）。

5／15　　　理事会の指示により、簡宿保護実現委員会にて「要望書」最終文が決定される。

　　↓　（居住懇でマスメディアへの事前アプローチを予定）

　　↓

5／25頃に予定

　大阪市役所にて「野宿生活者対策およびあいりん活性化にあたっての、簡宿活用についての要望書」を提出。

同時に、記者会見。

●評価

この運動はまさしく現在進行形であり、推進者としても現時点での明確な評価はできない。しかし、前向きに考えて、最低限、次のことを指摘したい。

１）実態および政策への影響

釜ケ崎周辺ひいては大阪市全域で急増している野宿生活者対策に対して、現実的で本格的な対応策の選択肢が初めて登場したこと。

政府や大都市自治体がホームレス対策の軸にするとみられる「自立支援センターの各地での開設」は、先行する東京都でスタートすらできないでいるように、有効性においてきわめて疑問である（もちろん、無いよりはマシ）。

これに対して、この簡宿活用方式ははるかに現実的である。

２）運動への影響

これまで大阪市などが、簡宿活用を求める運動体に対してこれを黙殺してきた根拠の一つは、「受け入れ側である簡宿組合側が協力を表明していない」という点であった。これが今や完全に崩れたことは、運動への大きな寄与である。

３）地域への影響

これまで釜ケ崎地域は、伝統的な労働運動軸偏重やその裏返しでもある事業体の営利主義、および行政機構における官僚的閉鎖主義等でものごとが展開してきた。

が、高齢化と不況によって、寄せ場機能や旧来型しくみの総崩壊の中で、総合対策による暮らしと地域の再建というまちづくり軸がようやくこの数年、認識されはじめてきた。

本件の立ち上がりと取り組みは、この流れを本格的なものにする。各団体どおしの対話が開始され、相互理解、そして協働の雰囲気へと流れが変わりつつある。この変化の意味は大きい。

とりわけ、簡易宿泊所組合は多かれ少なかれ、遅かれ早かれ、旧来型思考からの脱皮の過程をたどらざるをえないであろうし、そうなれば周辺団体へのインパクトは大きいものと思う。

しかし、この流れはまだあぶなっかしいものであり、早く定着することをお願いしたい。

４）私たち自身への影響

自分（たち）が古いタイプであるとは思わないけれども、私たちは私たちなりにその意識と行動においてさらなる脱却と、地域と社会への新しい貢献をしたいと模索してきた。９７年９月の釜ケ崎居住懇の立ちあげもそうであった。

この１年余の勉強会の果実としての「緊急アピール」が予想以上の賛意をいただいたこともさることながら、それがきっかけになって簡宿活用プロジェクトが現実に動き始めたことは、正直に言って、驚きですらあった。

これは、私たち自身への限りない励ましと自信として、今後への影響は大であろう。幸運とさまざまな人々のご協力に心から感謝する。

●今後の方向といくつかの課題

１）現在の簡宿プロジェクトを何としても実現させたい。この件では私たちに期待されるのは、簡宿組合や地域労働者団体などの諸組織をつないでいく＜コーディネーター＞という役割であろう。その立場にはできることの限界もあるが、誠実に粘り強くこなしていきたい。

２）しかし、木を見て森を見失わないようにする必要もある。つまり、現在の状況のこまかい動きに入り込み過ぎて、セカンドステージまでの全体構想を見失わないようにすることである。

そのためには、「セカンドステージ」のイメージをもっともっと具体的に鮮明にすることだと考える。

しかし率直に言って、力量不足もあり、それはまだまだ、というところだ。

もちろん、それは私たちだけの作業ではないが、簡宿プロジェクトを現実世界に引き出したあの緊急アピールのような、あらたな提言冊子の作成を急がねばならない。

ふたたび、＜提案者＞としての役割を地域社会で果たしたい。

３）おもしろいのは、この運動がインターネットを使うことによって始まったという点だろう。つまり、寄せ場という狭い共同空間であるにもかかわらず、労働者団体や私たちと、業者団体や町内会組織との距離は地球の裏側と同じくらい、遠かったのである。

この半年の運動が旧来と大きく異なる特徴のもう一つは、インターネットを使うことによる空間的・時間的なつながりの飛躍的な拡大と展開の早さである。

反面、そこから情報ギャップが生まれ、そして切実感や運動への参加意識等のギャップが生まれる。それは、私たちのように、みんなが参加する地域づくりや社会づくり（参加型社会）を標榜すればするほど、その補完作業が必要となる。

以上